

居館と囲郭集落のあいだ

伊勢湾地方を中心として

石黒立人

I. 集落研究概観

弥生時代の集落は決して単純ではなく、さまざまな類型に区分できる。

瀬戸内海地方に特に集中する、海や平野を丘陵などの高所からのぞむ位置にある集落は小野忠熙氏によって「高地性集落」とよばれ、その消長が軍事的緊張に関係するとして「倭国大乱」の議論にまで及んだ⁽¹⁾

また、弥生時代の遺跡を調査するとしばしば検出される〈住居跡群を囲む溝〉は、その溝を環濠とよび、環濠によって囲まれた集落を環濠集落（あるいは環溝集落；わたしは囲郭集落とよんでいる）とよぶことによってその一般性が浮き彫りにされた結果、集落の基本施設として認識されることになった。環濠集落が多数検出された関東地方では環濠がすべての集落に伴わないことから、環濠をもつ集落ともたない集落の差について関心を向けさせることになり、両者は田中義昭氏によって拠点型と周辺型に区分して整理された⁽²⁾

関東地方では大規模な開発にともなう発掘調査が進行して集落全体が明らかになることが多かっただけでなく、歳勝土・大塚遺跡のように集落と墓を同時に考えることのできる環濠集落の実例は、登呂遺跡以後の弥生集落の典型のようにさえ扱われるようになった。

それに対して西日本では集落の全体を調査することはまれで、そのため調査が小規模でも遺跡の有無によって識別できる「高地性集落」という概念は有効であった。だが、「高地性集落」集中地域における集落の区分は決して十分に行われているとはいえず、この点では石野博信氏による「高城と水城」⁽³⁾という対比に示されるような「高地性集落」に平野部の「環濠集落」を対比させようという動きは評価されるものであった。

近畿地方では安満遺跡や池上遺跡の調査もあって環濠集落への関心は一定程度あったものと思われるが、大多数は部分的な調査に終始したために、研究の盛り上がりには欠けるころがあった。環濠集落とはいっても単に大溝を検出したにすぎない例もあり、目に見えるかたちでの集落の把握はなかなか困難であったからだ。そのこともあって、特に社会的緊張を語る場合には環濠集落ではなく「高地性集落」に焦点があてられることが普通であった。そうした近畿地方にあって集落研究は、内部構造よりは外形や大小、継続性の分析に基づくモデルを中心とした研究に重心をおく以外になかったように思われる。

原口正三氏は大阪府安満遺跡とその周辺の遺跡を関係づける概念として母村／子村とい

う関係モデルを提出されたが⁽⁴⁾それもこうした事情によるものであろう。このモデルは一見するところ関東地方における拠点型集落／周辺型集落という区分の提示と一種平行的ではある。けれども、拠点型・周辺型という区分が環濠集落に焦点があるとはいえ、集落の動態と無関係に現象を整理するための固定的なモデルとして提示されているためにステイックであるという印象は免れない。それに比べて近畿地方のそれは、環濠集落と高地性集落との関係をも議論の射程に入れており、よりダイナミックに発展させることができる可能性を秘めていた。

このように、「高地性集落」はもっぱら西日本の瀬戸内海周辺地方で、「環濠集落」は北部九州・近畿地方・関東地方で研究の蓄積をみた。

さて現在。弥生集落論が低迷する中で、拠点集落については酒井龍一氏が社会分析の基点として注目し、セツルメントシステムの構築を行っている。しかし、酒井氏の拠点集落概念はきわめて典型的で一般的な集落という意味が強く、均質な要素以上のものにはなっていない。集落の内容が明かではない状況でのモデルといえる⁽⁵⁾

最後に。吉野ヶ里遺跡の調査以降、一般的な集落と首長の居住する居館との区分が新たな問題として浮上してきた。居館については古墳時代の事例が関東地方で多数調査され、三ツ寺遺跡に代表されるように突出部をもつ〈方形館〉に集約される傾向をみせている⁽⁶⁾。こうした方形館は古墳時代初期の例が大分県小迫原遺跡で検出されるに及び、弥生時代との連続性を見いだすことができ、武末純氏は福岡県比恵遺跡や佐賀県千塔山遺跡なども居住区が方形プランを呈することから居館である可能性を指摘するとともに、弥生集落を円形、居館を方形にたとえて両者が重なる弥生時代から分離する古墳時代への動きをモデル化した⁽⁷⁾。吉野ヶ里遺跡はそうしたなかにあってヤマタイ国ヒミコと関連づけられたためにセンセーショナルな話題を提供したが、中心居住区が方形に近似したプランであることと突出部をもつことが居館であることを示していると見なされているようだ。

以上関係する部分を概観した。弥生集落の研究は、当初遺跡立地に始まり、その規模や構造など、さらには社会を探るための動態的な把握へと進んだ。そして酒井龍一氏のように集落個々の特性を表面化させることなく社会復元モデルの構築を目指す立場がある一方で、下条信行氏のように地域・環境特性に基づいた村落の成立を弥生社会の分業体制を視点にすえて把握する方向も出されている⁽⁸⁾。私も村落の存立基盤を環境との相互作用におく立場で伊勢湾地方を中心として若干のモデルを提示したが、内容については今後の検討に委ねなければならないという限界があった。

私は、現在の弥生集落研究は、集落相互の関係から社会を復元するだけではなく、集落がいかにその時代を語るか、断片的な考古学的事実が集落によってどのように説明される

かという点に焦点が絞られる必要があると考えている。弥生集落と言えば、それですべてが説明できるわけではないだろうから。その点で居館は、集落を語る上で無視できないものである。それは環濠に代表される排除の論理が典型的に現象化されたものだからである。

以下では、居館を視点にすえて議論の展開を図ることにする。

II. 弥生時代の居館と可能性

A. 一般的な集落とそうでない集落

集落が人工的であることにだれも異存はないであろう。しかし、集落にもさまざまあって、それぞれ人工的といえる程度にも差がある。

「高地性集落」と「環濠集落」を比較した場合はどうか。遺跡の位置が高いか低いかは生産基盤や居住地などの自然環境条件との関係によって決定されることもあり、ただ単に高いところに集落が営まれている場合もあるのに対して、集落を囲む溝を掘るか掘らないかの決定は自然環境条件ではなく集落を営む集団固有の条件や社会環境条件に規定されるものである。そして「高地性集落」とされたものの中にも環濠をもつものともたないものの差があることを重視するならば、「高地性集落」自体にすでに性格の差があることになる。ただ高い位置にあるというだけの遺跡と、低地と同様の性格をもった高地の遺跡という差である。

してみれば、概念的にみて環濠集落のほうが高地性集落に比べて人工的な集落としての意味合いが強いものとなる。そして人工的である環濠集落にも環濠プランが自然地形（等高線ライン）に一致して卵型や楕円形などの曲線区画を呈するものと、自然地形と一致することのない方形（幾何学的）区画とに区別が可能であり、これについて自然適応的プランと計画先行的プランという言い換えが可能かもしれない。そして後者の計画先行的プランが一般的な集落に対応しないのであれば、そこに非一般的な集落をみる視点をおくことができることになる。問題はそれが「居館」として扱えるかどうかである。

一般的な集落とそうでない集落という対比を行うときの困難は、一般的な集落の存立基盤をただ水田耕作を中心とした体制に求めれば良いのかという点である。可耕地近傍に集落が営まれること、このことは一見当り前のようであるが、発掘調査によって対応関係が明確になった例はきわめて少ないのが実状である。弥生集落の近傍には可耕地があるはずだとして地図上に復元することも試みられているが、可耕地が推定できるからといって実際にそこで水田耕作が行われたと断定できないわけだから、なんら問題の解決にはならない。かえって問題を増やすだけだ⁽⁹⁾

一般的な集落とは、ある意味で酒井龍一氏がいうところの拠点集落としておくのが便利であるようにも思える。だが、そうすると平野からはずれた山間部や平坦地の少ない海岸部にある集落は一般的ではないことになる。この点については、酒井龍一氏のいう拠点集落に問題がある。拠点集落は平野・平地に占拠する集落に限定されているのであり、それ以外を含めて大きく議論されているわけではないからだ。

以下では一般的な集落と一般的ではない集落についての区分を試みることにしよう。

a. 弥生時代前期

伊勢湾地方では近年遠賀川系土器を出土する遺跡の調査例が増加している。それらの内、集落としての形式が把握できたものは、いずれも環濠を伴っている。そこで注目すべきは、台地縁辺に位置する永井・大谷・高蔵（おそらく白石も）は2条の溝が平行して掘削されている多重環濠のグループであるのに対して、平野微高地に位置する中之庄・松河戸・山中、そして現在調査中の月縄手は1条の溝が掘削されているのみであるという差である。遺跡は削平されているものが多いので溝の規模などを比較するわけにはいかないが、1条と2条という差は、立地差とも相関しており無視できないものがある。そして、このうちもっとも重要と思われるのが高蔵遺跡の様相である。高蔵遺跡のあるあたりは名古屋台地の南に続く熱田台地で、当時の海岸線からみて伊勢湾に半島状に突き出た部分に相当すると考えられる。つまり、水田稲作との関連を考えることはできないということである。

高蔵遺跡は全貌を伺うには困難も大きいですが、これまで調査された範囲から規模を推定すると南北200mの広がりがあったと思われ、他が100m以下であるのにくらべて格段に規模が大きい。高蔵遺跡は周囲に可耕地が推定できないにもかかわらず大規模であるという点において、一般的ではない集落とすることができる。

b. 弥生時代中期

弥生時代中期では、朝日遺跡が一般的ではない集落の代表である。中期初頭の環濠区画以外にも大溝で区画される居住区が複数並存する居住域、大型方形周溝墓の存在、玉作・貝の加工などの複数の生産部門、他地域からの土器の搬入など、複雑な内容をもっている。中期末にも少なくとも3重の環濠を巡らし、南部外郭には柵や逆茂木を備えている。

朝日遺跡の南西約5kmにある阿弥陀寺遺跡は、中期末に環濠が造成され部分的には多重化が行われている。朝日遺跡では観察できなかった竪穴廃絶後の土器などの廃棄も認められ、居住域内部空間の自由度が朝日遺跡に比べて幾分か高い印象を受ける。

阿弥陀寺遺跡北西約1.5kmにある森南遺跡では、ほぼ同時期の集落が調査されている。全体像の復元は困難だが、中期末に環濠の造成は行われておらず、当該期には移動した模様である。移動先が近接した阿弥陀寺遺跡であるかどうかは不明だが、阿弥陀寺遺跡よりは

下位に位置づけることができそうだ。

これら朝日・阿弥陀寺・森南の3遺跡は尾張平野南西部の平野低地部において5km圏内で近接して並存する遺跡であるから、その差は遺跡の性格の差として見ることは可能であろう。朝日遺跡に比肩できる遺跡はおそらく他にないと思われる。阿弥陀寺遺跡は酒井龍一氏の言う拠点集落の要件をみたしているようであり、普通の集落と位置づけておこう。

c. 弥生時代後期

弥生時代後期には名古屋台地周辺に注目される遺跡が出現する。瑞穂遺跡は遺構検出面での幅5～6m、深さ約4mという大規模な溝が2条検出されており、見晴台遺跡が同程度の溝があるとはいえ1条であることに比べて特筆される。ほかに2条検出されている例には山王山遺跡がある。平野部微高地では朝日遺跡以外それほどでもない。いずれも部分的であり、全体像はわからない。

弥生時代後期では、静岡県浜松市伊場遺跡が注目される。伊場遺跡は南部の一部が未調査であるが、ほぼ全体像を復元することができる遺跡である。居住域内部に各種遺構の検出はできなかったようだが、環濠は3条あり、しかも特異なプランをなしている。おそらく、これだけの要素をみるだけで一般的ではないと言えるだろう。

さて、伊場遺跡環濠のプランはいびつな瓢箪形を呈している。しかし、北部にある東西の環濠屈曲部分に注目するなら、これらがほぼ相対する位置にあり、この部分を結ぶと略方形区画が浮かび上がることを重視する必要がある。しかも南側の残りの部分も略方形のように見えるのである。このように、伊場遺跡のいびつなプランは二つの方形プランが連結した可能性を示しているのである。つまり、伊場遺跡の環濠は、その内部が主郭・副郭に分かれるのであり、その境界が未検出であるのは溝ではなく、柵あるいは土塁による区画が行われていた可能性が高いからだと考えることができる。

伊場遺跡の主郭は、おそらく居館であろう。しかし、これが居館の分離しつつある姿であるのかどうか。私は、これはそうではなく、これが弥生時代集落のうち、居館を含む集落（あるいは居館そのもの）の基本形態ではないかと考える。

B. 集落と居館

a. 囲郭集落の類型

囲郭集落は以下のように大きく3つの類型に区分できる。

第1類型：居住域が溝などによって囲まれるだけのもの

第2類型：居住域が溝などによって囲まれるだけでなく、居住域内部も溝などで区画されて複数の居住区に分かれるもの

第3類型：複数の分かれた居住区の中に中心居住区（主郭）が識別できるもの

これらは、第1類型が複数集まったものが第2類型、第2類型の区画のあり方から中心居住区が想定できるものが第3類型というように、一定の階梯関係にある。

この区分によれば、ヒミコの居館と騒がれた吉野ヶ里遺跡は、複数の居住区に分かれるわけではないけれど、中心が識別できる点で第3類型として把握されることになる。吉野ヶ里遺跡は、内容はきわめて単純で、外郭（副郭）・内郭（中心居住区：主郭）の区分が同心円構造をなしている。ある意味では単純に検出されたために理解しやすかったということになろう。

弥生時代の集落で環濠集落とされているものは第1類型がほとんどで、第2・第3は極めて少ない。ただ、この第2・第3類型は広範囲に調査しなければわからないのだから今後増加するかどうかは心許ない限りである。

さて、第2類型、第3類型については、それぞれ該当する遺跡があるので触れておこう。

朝日遺跡では、環濠区画とそれとは別に区画された複数の居住区が並存している。つまり、大きくみれば朝日遺跡は環濠区画が主郭、それ以外が副郭という区分ができるわけで、この点で伊場遺跡が主郭・副郭の単純モデルとして、両者を一種相似的な位置関係に置くことができる。第3類型にあてはめることは可能である。

奈良県唐古遺跡は、大環濠帯と呼ばれる外郭をもち、内郭は何条もの溝が走って区画されている。区画単位の実態についてはあきらかではないけれども、区画のどれかが主郭である可能性がある。いちおうは第2類型と考える。

長野県長野市松原遺跡は、これも溝によって区画された複数の居住区が並存している。主郭相当が存在するのかどうか詳細な検討は報告に委ねなければならないにしても、東日本の集落としては特筆されるものである。第2類型である。

伊場遺跡は上述したように、主・副2つの居住区の並存が考えられ、第3類型であるか、居館そのものということになるが、吉野ヶ里遺跡を含めて考えれば弥生時代中期と後期では第3類型の形が異なる可能性もある。後期はより単純化している様相が窺えるのであり、つまり中期の複雑性から後期の単純性への変化、これは社会そのものの成層化の新しい段階に対応しているのかもしれない。

弥生時代前期はこれまでのところ第1類型が圧倒的である。だが、高蔵遺跡では弧状溝に交差する溝が検出されているから、あるいは第2類型である可能性がある。

以上のように、囲郭集落の第1類型と第2・第3類型の間には大きな格差が存在する。そして、居館が第3類型のなかに存在する可能性の高いことはほぼ認めることができるだろう。あるいは、現状の調査限界で第2類型ではあっても、実は第3類型であるという場

合も当然でてくるであろう。第2類型であることは、一方では集落としての求心力が要請されるわけだから、そのことだけでも中心の存在、その実体化されたものとしての中心居住区（主郭）の存在は予想されるからである。

居館は、第2類型、第3類型に含まれている（あるいは第3類型自体が居館である）状況のほうを考えやすいが、といって単独に存在することがないということもできないのである。

b. 居館と大形建物

弥生時代には大形建物がある。もちろん、弥生時代に限定されるものではなく、縄文時代・古墳時代にもある。しかし、ここで問題にしたいのは、集落の内容としての住居様式で居館が識別可能かと言うことである。あるいは、掘立柱建物、とくに高床倉庫の存在によって居館が識別できるかどうかである。

上述したように、弥生時代に居館が想定できるとしても、それは集落に内属しており、独立して把握することは難しいであろう。実際のところ環濠集落において居館が想定されているのは九州の例に限定されているといっても過言ではない。その場合には、倉庫群の存在が指標とされているようだが、近畿以东ではそうした事例に接することはほとんどない。倉庫自体の認定が難しいのである。

そこで、大形建物に注目することにしたい。大形建物には2種類あって、竪穴式系と平地式（あるいは高床式系）がある。最近滋賀県内では後者の大形建物が検出されているようだが、しかし床面の確定は遺跡の遺存状態しだいでも困難なこともあり、柱穴が6本以上であるから平地式・高床式である、ということにもならないから、大形建物があるということにとどめておいたほうがよからう。

つまり、主柱が6本以上で、想定される床面積が80㎡以上を典型として考えたい。もちろん、4本柱でも床面積が80㎡以上であれば大形建物とする。この床面積80㎡という点にとくに根拠があるわけではないが、大形建物と言う以上は通常の建物の拡張可能範囲を超えた面積を指標とする必要があると考える。結果的に大形化したものではなく、当初から大形として建てられたものに限定したいからである。

大形建物は、関東地方で検討されたことはあるが、近畿地方以西ではそれほど十分な検討が行われてはいない。そして、九州の居館も大形建物の存在によって示されているわけではない。

大形建物の性格については、集会の場、共同作業の場、などいろいろいわれている。集会の場は、何らかの機会に集団成員が集まるために必要であり、居館の場合にも当然必要になろう。同じく集会の場としては広場があり、これも同様に居館の要素にあげることが

できる。この2つが第1類型に見られれば、居館の可能性はかなり高くなるのではないかと考える。それに倉庫が加われば完全であろう。

大形建物が共同作業の場合である場合は、それが集落のどこに位置するかが問題となる。第1類型であれば、居館との関わりを考えることは難しくなるが、第2類型、第3類型では居館を構成する要素であることも考えられるからである。つまり、居館内部か、居館近傍か、居館から遠いか、ということになる。この点は通常の工房跡の取扱にも関わってくる。

このように、居館の指標を倉庫の存在に求めるか大形建物の存在に求めるか、こうした問いが設定できること自体からみても、居館は自律的に決定できるものではないのだ。

c. 居館と工房

朝日遺跡では玉作遺構あるいは玉作が行われたと考えられる地点が3ヶ所存在する。そのうち2つが環濠区画内と外縁にあり、主郭内部あるいは近傍に設けられているといえる。残りの1つは東墓域下層にあり、その南には大小2棟1単位の掘立柱建物3単位からなる掘立柱建物群がある。この場合には、掘立柱建物群に隣接して玉作工房を含む竪穴建物群が存在すると言うほうが適切かも知れない。すなわち、掘立柱建物群から構成されるこの地区が中心居住区である可能性も生じることになる。しかし、仮にそれが中心居住区であったとしても、区画の溝は検出されていないから、これまで述べてきたような〈居館〉とは区別されることになる。これまでのところ、居館に内属する工房の存在を窺うことができる資料は得られていない。

C. 居館と集落の関係

弥生時代の居館を単独で把握することはおそらくかなり難しいだろう（吉野ヶ里遺跡にしてもだれも当初居館とは考えなかったであろう）。また、居館を古墳時代の事例から遡らせて類型設定することも、方法的には正しくないであろう。弥生時代の居館は弥生時代の集落の中に位置づけられて初めて意味をもつからだ。

弥生時代の集落は囲郭集落と非囲郭集落にわかれ、前者に居館が関係しそうであることは上述したとおりである。そして、囲郭集落でも内部が複数の居住区に区画され、そこにその地域の他の集落にはない生産部門が属している場合、その囲郭集落に居館が内属している可能性が高いと考えた。複数の居住区、複数の生産部門を抱えるという複雑性は、内部の不均質性を示しているものであり、そうした不均質な部分が分解に至らないための求心力を生じる中心が、集落にあっては居館ではないか、というよりそうした部分が複雑性を必要としているとも言えようか。あるいは、居館というのが不適切なら単に中心と言い替えてもよい。

囲郭集落が通常の集落形態となっている段階には第2・第3類型に居館が存在する可能性のあることを指摘したのであるが、非囲郭集落が通常となっている段階には居館はどのようなになっているのであろうか。

伊勢湾地方ではA期：弥生時代中期初頭、B期：中期中頃から後半、C期、中期末から後期初頭、D期：後期中ごろ、の4つの時期には非囲郭集落が通常形態となっている⁽¹⁰⁾

これらの時期に属す調査例が極めて少ないという現状のなかで、朝日遺跡ではA期に上述したような玉作工場の存在する地区を付随させて掘立柱建物群（大のほうは梁間2間であるから相対的には大形建物と言うことができようか）が存在し、またC期にも南北両面に庇のついた掘立柱建物を中心的建物とする一群の地区があり、溝による区画の存在は不明確だが、特異な存在として注目される。

これらは囲郭集落としての居館ではないけれども、弥生時代の居館がすべて区画を有していたといえるほど確定的ではない現状では、これらも〈類居館〉として把握しておくことにしたい。

Ⅲ．居館の出現と展開についての予察

弥生時代には、何ほどこ中心的な部分が現れる。もちろん中心的とはいっても、それがすぐさま居館として認定できるわけではない。しかし、私たちは武末氏が提示したものは別のモデルを提示することもできる。

まず、中心的部分（居館）が一般的な集落とは別に独立して存在する局面を局面Aとして位置づける。一般的な集落から中心（居館）が析出するのではなく、一般的な集落の成立と同時に、あるいはすでに何程かの中心が形成されている状況を考えようとするものである。この場合に居館のプランとして強調されている方形区画は、後出的なものとして扱い、当初の居館を規定しないという立場を取りたい。つまり、第3類型の展開の中だけでなく、第1類型の展開の中にも居館の存在を見ようとするものであり、したがって時期的には弥生時代前期をもその射程に含めることになる。しかし、現実的には、局面Aにおける居館の現れを見極めるのはきわめて困難であるだろう。伊勢湾地方では高蔵遺跡の様相が特異であり、第1類型であるのかそれ以外であるのか、判断に迷うが、とりあえずは農村的ではない点を重視してこれからも注目していきたい。

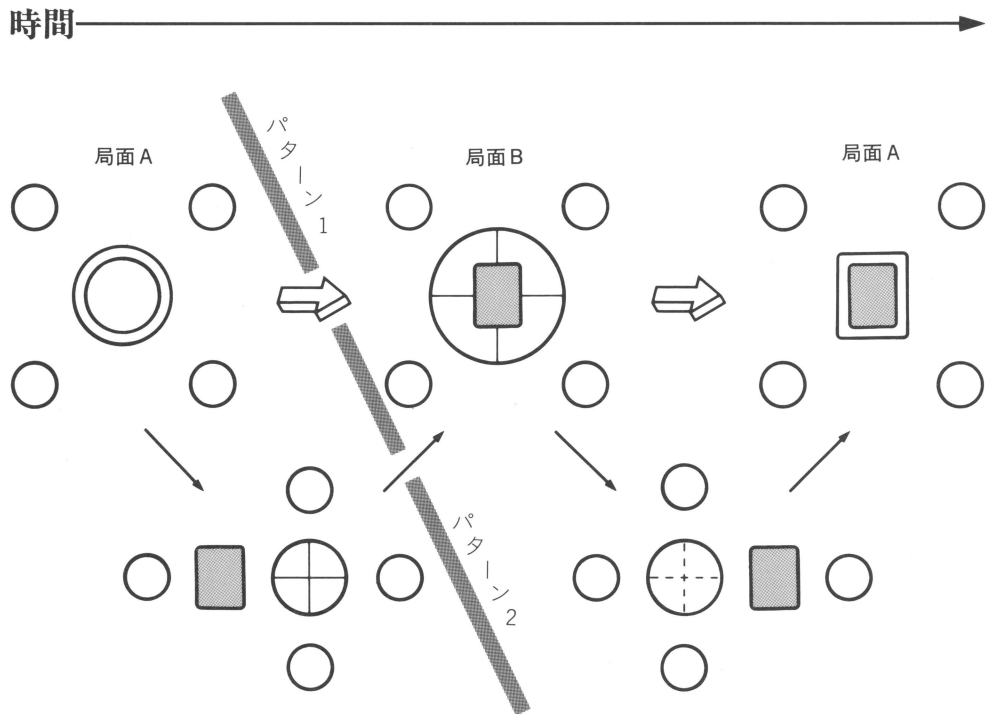
次に、弥生時代中期に典型化する第2類型、あるいは第3類型の囲郭集落の内部に居館が含まれる局面Bを考える。ただし、この場合には居館が当初から囲郭集落に内属して第3類型となっている状況と、第2類型の囲郭集落に隣接して並存する状況の二つのあり方を考えることができる。後者は、局面Aから局面Bへの移行にあって、武末氏の提示した

居館が集落から離脱しつつある段階のモデルを反転して、第3類型の囲郭集落形成の直前段階を想定するものである。

つまり、第3類型の囲郭集落形成にあつては、パターン1：居館を中心に第3類型が形成される、パターン2：第2類型が形成されて後に居館が内部に移動して第3類型になる、二つの型を想定する。そして、パターン2については、a：第2類型の囲郭集落と居館が並存、b：第2類型の囲郭集落内部に居館が定着して第3類型を形成する、というaからbへの移行を想定する。そして、この段階になって方形区画が中心を示すものとして定着すると考える。

弥生時代中期には、弥生時代前期にくらべてはるかに集落規模の格差が生じ、成層的な外観を呈している。かりに大形集落の形成が弥生時代前期後半にあるならば、その時点で局面Bに移行することも考えられる⁽¹⁾

凹線紋系土器波及期は、在来の第2類型（および第3類型）の囲郭集落が崩壊して小集落の分散となる。そして、新たに掘立柱建物を高い頻度で構成要素とする集落が出現する。現状では、居館の実体は不明だが、第2類型・第3類型の囲郭集落が不明確であることから、局面Aである可能性は高い。



第1図 居館と囲郭集落

弥生時代後期は、一見弥生時代前期と類似した集落の展開が窺える。弥生時代中期のような成層的な集落規模格差は無くなって、第1類型の囲郭集落の展開を基盤に居館が散在するのではないかと予想される。かりに、規模格差があるとすればそれは成層ではなく、中期以上に隔絶した(おそらく第1類型と第3類型の鮮明な対立)関係になろう。そして、これまでのところ、居館に相当しそうな集落は第3類型の囲郭集落に限定されており、実際第3類型自体が居館であることも考えられるので、局面Aとして位置づけられる可能性が高い。

以上、局面A→局面B→局面Aという変遷を想定した。非囲郭集落としての居館の様相は把握が困難であるが、囲郭集落時には第3類型に含まれる弥生時代中期と、含まれるとすれば特異であり、第3類型の囲郭集落それ自体が居館である可能性のほうが考えやすい。弥生時代後期という大枠の設定を試みた。いずれにしても実態の把握が急務であり、将来あらためて論じることもあるだろう。

註

- (1) 高地性集落の研究については、森岡秀人「高地性集落」『弥生文化の研究 7 弥生集落』1986、に詳しい。
- (2) 田中義昭「南関東の弥生時代集落」『考古学研究』25-4、1979。
- (3) 石野博信「3世紀の水城と高城」『古代学研究』68、1973。
- (4) 原口正三『高槻市史』考古編、1973。
- (5) 酒井龍一「弥生時代中期・畿内社会の構造とセトルメントシステム」『文化財学報』3、1984。他一連の業績。
- (6) 埋蔵文化財研究会・東海埋蔵文化財研究会『弥生時代の環濠集落をめぐる諸問題』資料編、1988。
- (7) 武末純一「紫川の吉野ヶ里—北九州市上徳遺跡—」『古文化談叢』23、1990。26頁第2図参照。
- (8) 下条信行「弥生時代の玄海灘海人の動向—漁村の出現と役割」『横山浩一退官記念論文集』I、1991。
- (9) 遺跡を認定する方法としては不確定要素が大きいだけでなく、自然環境が変化するという基本的認識が欠如している場合もまま見られる。
- (10) 朝日遺跡は中期前葉に囲郭集落を形成するが、同時期に囲郭集落化する例は他にない。まだ発見されていないのかもしれないが、私はそれより朝日遺跡の集落設計が大幅に変わったというのが実は個別的事情、つまり朝日遺跡における中心の形成による構造変化である可能性が濃厚だと見ている。それが以下にのべる局面Bである。
- (11) 大形集落内部に居館が析出される過程は明らかではない。また、大形集落成立の起動因に居館があるかどうか不明である。しかし、大形集落の形成が人々の集住によるとしても、大形集落は(土器編年の細分問題は留保するとして)長期継続の結果ではなく突如出現することもありまた突如消滅することもあるのだから、単に人口増加を原因とするものではないということはある。したがって、遠賀川系土器成立以降の時代にあつて、当初は平板であり後に社会的成層化が進行するなかでいわゆる首長(層)が析出され、それに対応して居館が成立するというのは、私にはきわめて発展段階的な図式に影響された発想に思える。

私はそうではなく、逆に何らかの要因によって(この要因を明らかにするのが重要な課題であると考えのだが)大形集落が形成され、その結果それまで通常の集落とは距離を置いていた部分(後の居館：通常の集落と同時かやや遅れて成立したと考える)が、大形集落の近傍へ引き寄せられ、そして内部に移動し、さらに中心を占めるようになるという、そうした動きも考えたい。すなわち、“並存から共存・共生、そして寄生”、あるいは異質な部分が秩序化されることによる社会の垂直方向への分化。おそらく、その基礎には組織的な武力の保持があったのではないかと。